

# 一六、一七世紀ドイツにおけるイギリス毛織物の輸入・仕上げ・販売

——「ロンドン・アントワープ枢軸」の延長——

諸 田 實

## 目 次

はじめに

- 一 マーチャント・アドヴェンチャラーズによる毛織物輸出とその輸出先指定港の変遷
- 二 ドイツの指定港におけるイギリス毛織物の輸入とその仕上げ
- 三 ドイツにおけるマーチャント・アドヴェンチャラーズ——居住・特権・取引

## はじめに

本稿は、一六世紀後半から一七世紀初めにかけて、ドイツへ輸入されたイギリス毛織物の染色・仕上げ、販売の実態と、マーチャント・アドヴェンチャラーズ（ドイツへの輸出を「独占」していた「毛織物輸出商組合」に所属するイギリス人貿易商）のドイツにおける活動について、バウマンの新研究（Wolf-Rüdiger Baumann, *The Merchants Adventurers and the Continental Cloth-trade (1560 s—1620 s)*, 1990）を中心に粗描したノートである。筆者がこの問題を取りあげた

のは、この時代の経済史のなかで次の二つの問題が、バウマンの新研究によってある程度まで明らかにされたからである。はじめにその点を、研究史に関連づけて説明しておこう。

(一) 一六世紀のヨーロッパでは、ヴェネツィアとブリュッヘ（ブリュージュ）を中心とするこれまでの遠隔地間の商業システム（いわゆる「中世の世界経済」レーリヒ）が崩れ、これに代ってアントウエルペンを中心とする商業（と金融）の新しいシステムが成立するが、アントウエルペンがこの新しいシステムの中心として国際的貿易（と金融）センターへ発展するうえで重要な役割を演じたのは、ポルトガルとスペインが獲得した香辛料その他の海外の産品、その対価として重要性をましたドイツの鉱産物と金物、これらとやらんで、とりわけ一五世紀後半から急増するイギリス毛織物の取引であった。よく知られているように、毛織物は一五世紀末から一九世紀初めまで三〇〇年余にわたってイギリスの最重要な輸出品であったが、特に一六世紀には、その大部分がマーチャント・アドヴェンチャラーズによって未仕上げの状態で、いわば半製品としてロンドンからアントウエルペンへ、そして一五六〇年代に低地地方に反乱が起こってからはドイツ（エムデン、ハンブルク、シュターデ）と低地地方（ミッドウルブルフ、デルフト、ロッテルダム、ドルトレヒト）の諸港へ輸出され、アントウエルペンをはじめ低地地方とドイツの諸都市で染色・仕上げを施されて広く中央ヨーロッパの大市（おおいち）で販売されていた。

このイギリス毛織物輸出の動向については、すでに船山栄一氏がイギリス側の史料（『関税会計録』）にもとづいて詳細に明らかにしているが、<sup>(1)</sup>低地地方やドイツの諸港へ荷揚げされてからの染色・仕上げの加工と販売の実態については、なお不明な部分が残されている。以下で紹介するようにバウマンの新研究は、一五六〇年代から一六二〇年代までの時期について、ドイツの諸港におけるイギリス毛織物の輸入量、輸入したイギリス毛織物の染色・仕上げ加工と販売の実態とドイツの内陸部にまで進出したマーチャント・アドヴェンチャラーズの活動を、イギリス側の史料に

加えてドイツ側の史料を使って明らかにしたもので、これによって、これまで詳細については不明とされてきた部分つまり、ドイツの諸港へ荷揚げされてからのイギリス毛織物のその後の流れ（染色・仕上げ加工と販売）がある程度まで明らかになった。その点で本稿は、一六世紀のイギリス毛織物輸出における「ロンドン＝アントウェルペン枢軸」を明らかにした船山氏の研究の延長線上にある、ということもできるであろう。

(二) 一方、本稿が対象とする一五六〇年代から一六二〇年代にかけての時期は、ザクセンからオーバーラウジツ、北ボエーメンおよびシュレージエン（シロンスク）にかけての中東部ドイツで、麻織物の買付において問屋制度の歴史上独自の形態とされる「ツンフトカウフ」(Zunftkauf od. der kollektive Lieferungsvertrag) が成立した時期に当たっている。この地域はすでに中世末に南ドイツと並ぶ麻織物の特産地であったが、一八世紀にかけてドイツ屈指の麻織物生産地に発展し、その製品はヨーロッパ各地ばかりでなく西アフリカやアメリカ新大陸にまで輸出されていた。ちなみに、一八世紀のプロイセン（ドイツ）の最重要輸出品はシュレージエン製の麻織物である。

この中東部ドイツの麻織物生産地では、ちょうどその頃、ニュルンベルクやライプツィヒの商人（麻織物問屋）がこの地域の麻織工ツンフトとの間で、「ツンフトカウフ」と呼ばれる資金の前貸と一括買入れ＝納入の契約を結んで、大量に麻織物を買付け、これを主として南欧へ売りさばいていた。三十年戦争前夜のこの時期は、中東部ドイツの麻織物工業史において「ニュルンベルク商人の時代」(das Zeitalter der Nürnberger) あるいは「ツンフトカウフ」の時代と呼ばれている。筆者もかつて、ヘルビツヒ編の史料集 (Herbert Helbig (Hrsg.), *Quellen zur älteren Wirtschaftsgeschichte Mitteldeutschlands*, 1953.) に収録されているニュルンベルクの問屋商人と現地の麻織工ツンフトとの間で結ばれた「ツンフトカウフ」の契約書や、オバンとクンツェの研究などを使って「ツンフトカウフ」の成立と構造を考察し、その後、ザイボルトの-new研究によって最大の麻織物問屋であったバルトロメウス・ヴィアティス（一五三八—

一六二四)の生涯と遺産を紹介したことがある。<sup>(2)</sup>

ただし、これらの筆者の以前の論文では、「ツンフトカウフ」を結んで麻織物を買いつけていた商人のなかに、ニュルンベルクやライプツィヒなどのドイツ人商人のほか、かなりの数のイギリス人商人が活動していたことは指摘しておいたが、イギリス人商人の経歴や活動の詳細については明らかにすることができなかった。バウマンの新研究はこの点についても、ドイツへ毛織物を輸入したイギリス人商人のなかからドイツの内陸部へ進出して「ツンフトカウフ」を結んで麻織物を買いつけた商人が出たことを、彼らの経歴と活動の実態を明らかにして述べており、これによって、筆者の旧稿で不明のまま残されていた問題がある程度まで明らかにされることになった。

以上のように本稿は、一六世紀後半から一七世紀初めにかけて、ドイツの諸港へ輸出されたイギリス毛織物の染色・仕上げと販売について、およびドイツの内陸部へ進出して「ツンフトカウフ」を結んで麻織物を買いつけたイギリス人商人の経歴と活動について、これまで不明とされていた問題がある程度まで明らかにした点で、多少の新事実を提供することになるのではないかと思う。

# 注

(1) 船山栄一『イギリスにおける経済構成の転換』(未来社、一九六七年)、同「イギリス貿易の展開」(大塚久雄編著)『西洋経済史』筑摩書房、一九七七年。

(2) 諸田實「一六、一七世紀中東部ドイツ麻織物工業における「ツンフトカウフ」」(『商経論叢』一六―四)、同「バルトロメウス・ヴィアティス(一五三八―一六二四)―南ドイツ麻織物商の生涯と遺産」(『商経論叢』一九―二)。



## 一 マーチャント・アドヴェンチャラーズによる毛織物輸出とその輸出先指定港の変遷

1 イギリス毛織物のアントウェルペンへの輸出 イギリス（イングランド王国）の外国貿易、特に輸出品の主力は、一五世紀を境いにして、それ以前の羊毛（原料）から毛織物（半製品）へ転換した。一四世紀半ばまで年間三万五、〇〇〇袋（約二、二八〇万重量ポンド）もあった羊毛の輸出量は、一四〇〇年に一万三、〇〇〇袋、一四五〇年に九、〇〇〇袋、一五〇〇年に七、〇〇〇袋と減少し、一五四三年以降はもはや一、〇〇〇袋を超えることはなかった。これに対して、毛織物の輸出量は一五世紀末から急上昇し、一五〇〇年に八万二、〇〇〇反、一五三三年に一〇万反、一五四三年に一三万七、〇〇〇反に達した。一三、一四世紀にはイギリスの輸出総額のなかで羊毛が八〇―九〇パーセントを占めていたのに、一五六五年九月に終る年度では毛織物が八一・六パーセントを占めている。イギリスの主力輸出品の変化は明らかである。<sup>(1)</sup>

一六世紀にイギリスの輸出の主力商品となった毛織物は、主として未仕上げの白地広幅（ニヤード）約一八三センチ以上）の厚手毛織物（いわゆる旧毛織物 “Old Drapery”）と粗い薄手のカージー織で、その大部分がロンドンの「毛織物輸出商組合」（Company of Merchant Adventurers）に所属する貿易商によって、南ネーデルラントのアントウェルペンへ輸出されていた。毛織物を積んだイギリスの船団は通常、年二回（クリスマス頃と聖霊降臨祭の頃）護衛艦つきでロンドンを出港し、アントウェルペンへ入港すると、貿易商は月、水、金曜日の “showdays” にこれ売りさばいた。イタリア人とハンザ人もこの毛織物貿易に参加していたが、一六世紀には外国人のシェアは三〇パーセントを切っていた。<sup>(2)</sup>

一六世紀初め（一五〇一―一〇七年）には平均して年約八万二、〇〇〇反<sup>ケロス</sup>の毛織物がイギリスから輸出されていた

が、その七〇—八〇パーセントがアントウエルペンへ送られた、と推定されている。一五四九—五〇年にはマーチャント・アドヴェンチャラーズは五万〇一五八反<sup>ケロース</sup>の厚手毛織物と四万九、九六四反<sup>ロース</sup>のカーギーをアントウエルペンへ向けて輸出し、一五五四年には一三万五、五九五反<sup>ケロース</sup>の毛織物がロンドン港から輸出された。ロンドンからアントウエルペンへというのが、一六世紀に最も重要なイギリス毛織物の輸出経路であった。<sup>(3)</sup>

このようなイギリスの輸出貿易の転換と並行して、相手地域のネーデルラントにも大きな変化が起こった。織物業の盛んなネーデルラントの二〇〇余の都市のうち、イギリスの羊毛を原料にしていた主としてフランドル地方の毛織物工業都市が「危機」に陥ったのは対照的に、アントウエルペンがイギリスから輸出された毛織物を受け入れて、一五世紀後半から急速に繁栄に向かった。その理由は恐らく、未仕上げのイギリス毛織物に染色、けば立て、つや出しなどを施す仕上げ業が盛んであったこと、および、ケルンやフランクフルト・アム・マインを介してドイツに、さらにスイスやイタリアやオーストリアにまで毛織物の販路をもっていたためであろう。一五三七年には毛織物の仕上げに従事する親方と職人は一、三四八人<sup>(4)</sup>（徒弟を除く。うち二九一人が親方手工業者）、六〇年代初めまでにこの数は一、六〇〇人に増加した。イギリス毛織物の輸入・仕上げ・販売は、ポルトガルとスペインからもたらされる香料や植民地産品、地元やドイツの鉱産物、金属製品の商業と並んで、アントウエルペンの商業の繁栄を支える三大部門の一つであった。<sup>(5)</sup>

アントウエルペンにおける毛織物取引について、三の実例をあげて説明してみよう。

(一) 売り手ウイレム・コパート（ロンドン商人トーマス・タッセとヤン・コスワードの代理人<sup>インストラクター</sup>）と買い手クリストフフェル・ハインセル（アウクスブルク商人ヨハン・レンツとフリードリヒ・レンツの代理人<sup>インストラクター</sup>）との間のカーギー四三〇反<sup>ロース</sup>の売買契約（一五四四年）。この契約は二人の証人の立ち合いのもとに、公証人の前で結ばれた。その内容は次の通りであ

る。

①商品の引渡し。四八反<sup>ビーム</sup>はすでに引渡し済み、残りは六週間以内にベルヘン・オブ・ゾームかアントウエルペンで引渡す。②荷物の保険。イギリス船の場合もオランダ船の場合も買い手が危険と費用を負担する。③支払。代金はカージー<sup>ビーム</sup>一反<sup>ビーム</sup>当り四一フランドル・シリリング（四三〇反<sup>ビーム</sup>では八八・五フランドル・ポンド）。取引所公認の良質の鋳貨で、半額は商品の引渡し時に、残りの半額は次の復活祭の大都市で支払う。④罰金。違約の場合の罰金は三〇フランドル・ポンド<sup>(6)</sup>。

(二) ハンブルク商人ヤーコプ・シュレーダーのアントウエルペン代理人の仕訳帳の記載（一五五三年三月から五四年三月まで）。シュレーダーはこの一年間に二、四九二フランドル・ポンド一〇シリリング一〇ペンス分の商品を買って（うち一、一一〇ポンド余、約四五パーセントがイギリス毛織物）、四、六〇〇フランドル・ポンドで売っている。イギリス毛織物の売買は五月から九月までの間で、その中から二回の買いつけの例をあげる。

①五月一二日の分。マーティン・コールからサフォーク・クロス二包<sup>パック</sup>みを一包<sup>パック</sup>み三二フランドル・ポンドで、これよりやや上等のもの半包<sup>パック</sup>みを一八フランドル・ポンドで、同じくサフォークの上等品二クロスをクロス当り七 $\frac{1}{2}$ フランドル・ポンドで、粗い織りのもの一クロス<sup>パック</sup>を二 $\frac{1}{2}$ ポンドで、合計九九フランドル・ポンド一〇シリリングで買う。支払いは同じ日に、一部分は現物（オスナブリュックの〔麻〕織物半ロール、三六フランドル・ポンド五シリリング相当）、一部分は現金四九フランドル・ポンド五シリリングで行われ、残額について八月末までの手形を渡した。この手形は九月一二日に第三者ダニエル・ファン・デア・フェヒトからドイツの鋳貨で支払われた。

②六月一三日の分。ヨハン・ファン・ヘストからウィルトシャーとウスターの白地<sup>パック</sup>その他の反物三包<sup>パック</sup>みを一包<sup>パック</sup>み五二 $\frac{1}{2}$ フランドル・ポンド、総額一五七ポンドで、ウィルトシャーの白地反物<sup>パック</sup>ほか一包<sup>パック</sup>みを五四フランドル・ポンド

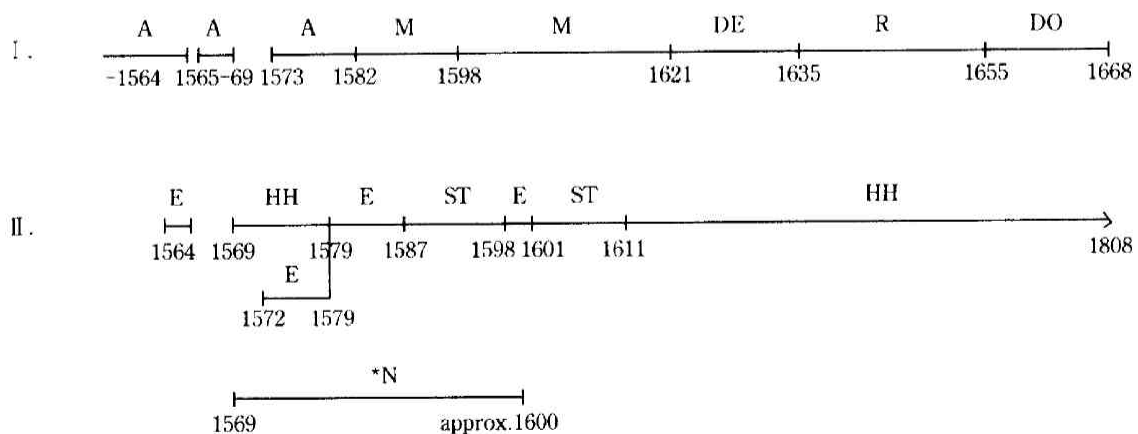
で買う。支払いは一か月半以内に五回に分けて、一部はシュレーダー自身によって、一部（三九ポンド一九シリング三ペンス）はユルゲン・トーピングによって、一部（七二 $\frac{1}{2}$ ポンド）はライアー・ペテルセンによって、一部（三五ポンド・四シリング）はミカエル・エルムスによって、いずれも現金で行われた。<sup>(7)</sup>

以上述べたように、一六世紀にイギリス毛織物はマーチャント・アドヴェンチャラーズの手でアントウェルペンへ向けて盛んに輸出されていたが、一五六〇年代に低地地方に反乱（オランダ独立戦争）が起これと、この輸出経路は妨害され、そのたびに組合は輸出先指定港の変更を余儀なくされることになった。

2 ドイツにおける輸出先指定港の変遷 一六世紀半ばまでロンドン港から輸出されたイギリス毛織物の大部分を受け入れていたアントウェルペン、一五六〇年代から混乱するネーデルラント情勢の影響を受けて、西欧世界の貿易・金融センターとしての地位を失っていき、それに伴って、マーチャント・アドヴェンチャラーズ組合の輸出先指定港（以下、指定港という）も次のように目まぐるしく変遷をとげた。（図1を参照）

低地地方の指定港は、一五六九—七三年間の中断期間を含ん

図1. 低地地方とドイツにおけるマーチャント・アドヴェンチャラーズ組合の輸出先指定港と取引の中心地（1564年以降）



注 I 低地地方：A=アントウェルペン，DE=デルフト，DO=ドルトレヒト，  
M=ミッドルブルフ，R=ロッテルダム

II ドイツ：E=エムデン，HH=ハンブルク，ST=シュターデ，N=ニュルンベルク  
W.-R. Baumann, *op.cit.*, p. 5.

で、一五八二年までアントウェルペンであったが、その後一五八二―九八年、一五九八―一六二一年間がミドウブルフ、一六二一―三五年間がデルフト、一六三五―五五年間がロッテルダム、一六五五―六八年間がドルトレヒトとなった。ただし、本稿では低地地方の指定港についてはこれ以上扱わない。

ドイツの指定港は、一五六四年にエムデン、一五六九―七九一年間がハンブルク（一五七二―七九一年間はエムデンも）、一五七九―八九一年間がエムデン、一五八七―九八年間がシュターデ、一五九八―一六〇一年間がエムデン、一六〇一―一一年間がシュターデ、一六一一―一八〇八年までハンブルクであった（イーストランド・カンパニーの指定港はエルビング）。なお、この間、指定港ではないが内陸のニュルンベルクも一五六九年から一六〇〇年頃にかけて、イギリス毛織物の重要な取引地であった。以下、指定港の移転の事情を追ってみよう。

イギリスとスペイン領ネーデルラントとの関係は、熱烈なカトリック教徒でスペイン王妃でもあった英女王メアリの死（一五五八年）後悪化し、ネーデルラント総督パルマ公は一五六三年一月にイギリス毛織物の輸入を禁止した。マーチャント・アドヴェンチャラーズは指定港の移転を考え、翌六四年二月に東フリースラント伯からエムデンを指定港とする許可（特許状）を獲得した。三月にはハンブルク市当局からも同様の許可を得ている。六四年にエムデンが指定港になったのはこういう事情によるもので、四月には早くも三隻の毛織物船が、また、五月二三日には四五隻余（護衛艦三、四隻）の毛織物船団がエムデンに入港した。<sup>(8)</sup>

しかし、エムデンが指定港になったのは、この時は一五六四年の一年だけであった。その主な理由は、毛織物の最終消費地であるドイツ、スイス、オーストリア、イタリアへの中継地としてハンブルクの方がまざっていること、および、低地地方で聖像破壊運動が起こり、カトリック以外の者への報復が激しくなったこと、であろう。事実、六四年以降もアドヴェンチャラーズはアントウェルペンに留まって、六八年七月にはここからハンブルクへ四隻分の毛織

物を送っており、ネーデルラント総督はエムデンへ行くことを禁止し、ケルンその他のハンザ都市もエムデンでは買付けなかった。ところが、六八年一二月にスペインからの銀輸送船団がイギリス側に拿捕されて積荷の銀が没収され、それに対してネーデルラントに在住するイギリス人商人が身柄を拘束され、商品が没収されるという事件が起こった。ハンブルク市はすでに六七年三月にイギリス毛織物の受け入れを許可していたが、こうした事情で六九年二月に指定港になった。五月にはイギリスの毛織物船団がハンブルクへ入港している。

ハンブルクが指定港になったことでマーチャント・アドヴェンチャラーズはハンザ都市の中心部に橋頭堡を築くことに成功し、一方、ハンブルクは、未仕上げのイギリス毛織物の仕上げと販売という重要な商取引を引き寄せた。地元の商人のほか亡命してきた国際的商人も誕生する。反乱が拡大してアントウェルペンの商業が困難になったことはハンブルクに有利に働いたが、しかし、イギリスにおけるハンザの特権が復活されなかったため、市参事会は七八年六月にアドヴェンチャラーズに対して彼らの特権を更新しないことを通告した。その結果、ドイツにおける指定港は七九年からふたたびエムデンに移り、アドヴェンチャラーズは全員七九年三月までにハンブルクを離れた。

一五八六年にエムデンとの特許状更新の交渉が長引いたために、指定港は八七年にエムデンからシュターデに移ったが、その間、八二年にアドヴェンチャラーズはアントウェルペンから退去することを決め、低地地方の指定港はミドゥルブルフに移った。また、ハンザはアドヴェンチャラーズの進出を押さえようと皇帝に働きかけ、九七年八月一日にアドヴェンチャラーズを帝国から追放する勅令が布告された。

この追放令にもかかわらずアドヴェンチャラーズは九八年エムデンへ戻り、指定港は九九年にみたびエムデンになったが、関税問題が原因で一六〇一年にふたたびシュターデに移った。そして、ハンブルクがアドヴェンチャラーズの受け入れを提案した時、アドヴェンチャラーズ側はこれに同意し、結局、一六一一年六月にハンブルク市参事会



は彼らに特許状を与えた。以後一八〇八年まで、ハンブルクがドイツにおけるアドヴェンチャラーズの指定港となるのである。

# 注

(1) 船山栄二、前掲書および前掲論文、W. -R. Baumann, *The Merchants Adventurers and the Continental Clothtrade (1560s—1620s)*, 1990. なお、イギリスの羊毛輸出量は、右の船山氏の研究によれば、一四世紀初めの最盛期に約一、四六〇万ポンド(重)であったが、のちに、スペイン(カステイリヤ)からの羊毛輸出量は、一六世紀半ばの最盛期に約一、四〇〇万ポンド(重)であった。飯田敏彦「一六、一七世紀カステイリヤの羊毛貿易」『社会経済史学』五八—五九。

(2) イギリスの毛織物輸出に占める外国人(うちハンザ商人)のシェアは、一五世紀半ばに約四五% (二二%)、一六世紀半ばに約二五% (一一%)、一七世紀初めに約三—五%であったという。W. -R. Baumann, *op. cit.*, p. 140. 毛織物船団のロンドン出港、指定港入港の時期について、バウマンは五月と一〇月とも述べていて、一定しない。ブラバント(アントウェルペンとベルヘン・オブ・ゾーム)の大都市は年四回(クリスマスの大都市、復活祭の大都市、聖霊降臨祭の大都市、聖バフオン〔パマス〕の大都市)開かれ、決済期間はそれぞれ、一月三—日—二月一〇日、五月一日—一〇日、八月一日—一〇日、一〇月三—日—十一月一〇日であった。船団の規模は、五〇—六〇隻で、一六世紀半ばまでは護衛艦つき、規模はしだいに小さくなった。

*Ibid.* p. 137, 217.

(3) 船山栄二、前掲論文、九七ページ。一六世紀初めにはイギリス毛織物は、アントウェルペンのほかベルヘン・オブ・ゾームやミドウルブルフへも送られていたが、一五三〇年代からのベルヘン・オブ・ゾームの大都市の衰退も影響して、三六年から船団はアントウェルペンへ入港した。W. -R. Baumann, *op. cit.*, p. 217. この毛織物輸出において、イギリス人貿易商(アドヴェンチャラーズ)は「大陸の富豪商人」(イタリアや南ドイツの商人)に金融的に依存していたようである。渡辺源次郎『イギリス初期重商主義研究』(未来社、一九五九年)八八、八九ページ。

(4) W. -R. Baumann, *op. cit.* p. 38. 中沢勝三『アントウェルペン国際商業の世界』(同文館、一九九三年)二〇二—二〇四ページ参照。

(5) 一六世紀のアントウェルペンの商業については、中沢勝三、前掲書、諸田實『フッガー家の時代』(有斐閣、一九九八年)第四章、を参照。



- (6) J. Strieder, *Antwepener Notariatsarchiven*, Nv. 228. W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 218 f.
- (7) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 219 f.
- (8) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 84, 112. この当時、エムデンの人口は約二万四、〇〇〇、それに対してハンブルクの人口は約二万であつた。以下、指定港の変遷の理由については、パウマンの記述によつた。なお、この間の事情は、スペイン、フランス、イギリスの王室相互間の協調と敵対、低地地方の反乱（オランダ独立戦争）、オスマン・トルコの地中海侵入、というヨーロッパの政治的・軍事的情勢が強く影響している。簡単には、諸田、前掲書、第五章を参照。英・独間の貿易をめぐるマーチャント・アドヴェンチャラーズとハンザ商人の対抗について、クーリッシエルは次のように述べている。「…統一性に欠けていたことがハンザ人に対するイギリス人の勝利を可能にした。個々の都市は自分自身のその場かぎりの利益を考え、よくこんで全体の利益を犠牲に供したのである。」クーリッシエル、松田監修、諸田他訳『ヨーロッパ近世経済史』（東洋経済新報社、一九八二年）I、三四六ページ。

## 二 ドイツの指定港におけるイギリス毛織物の輸入とその仕上げ

1 ドイツの指定港の輸入量（一五六四—一六二一年） 船山栄一氏は前にあげた著書の中で、一六世紀から一七世紀にかけてイギリス毛織物（旧毛織物）の輸出量の推移を、次のように三期に分けて解説している。<sup>(1)</sup>

第一期は一六世紀前半の拡張期で、一五五〇年に一三万二、八〇〇クロスのピークに到達する。五〇年間に二・七倍の伸びで、以降、旧毛織物の輸出量はこの水準に達することはない。第二期は一五五二年の不況に始まる沈滞期で、一七世紀一〇年代まで九万クロスの線を上下しながら停滞を続ける。第三期はいわゆる「大不況」の影響を受けた衰退期で、旧毛織物の中でも特に未仕上げ広幅織の減少はいちじるしい。旧毛織物全体では、一六一六年に八万八、二〇〇クロスから一六二二年に七万五、六〇〇クロス（一六四〇年までに最低の数字）へ減少、そのうち未仕上げ広幅織だけでは、一六一四年に八万七、三〇〇クロスから一六四〇年に三万〇、一〇〇クロスへ、三分の一近くに激

表 1. ロンドン港からの毛織物輸出量

(単位 1000 クロス)

年 次	woollen	年 次	woollen
1559—61	93. 8	1601	100. 4
1562—64	61. 2	1602	113. 5
1565—67	95. 1	1603	89. 6
1568—70	93. 7	1604	112. 8
1571—73	73. 2	1605	99. 9
1574—76	100. 0	1606	126. 0
1577—79	97. 7	1607	115. 8
1580—82	98. 0	1608	119. 8
1583—85	101. 2	1609	113. 8
1586—88	95. 1	1610	95. 0
1589—91	98. 8	1611	96. 0
1592—94	101. 7	1614	127. 2
1598—1600	103. 0	1616	88. 2
		1618	102. 3
		1620	85. 5
		1622	75. 6
		1626	91. 0

船山栄一『イギリスにおける経済構成の転換』

(未来社, 1967 年) 11, 12 ページ, 第 1 表 A, B より。

減している(表 1 参照)。

したがって、これによれば、本稿が対象とする一五六〇年代から一六二〇年代までの時期は、輸出量が九万クロス前後の水準で停滞を続ける第二期に相当する。九万クロスから一万五、〇〇〇クロスぐらいの間という、ロンドン港からの毛織物輸出量全体の数字を念頭において、アントウエルペンに代わって指定港になったドイツ諸都市(エムデン、シュ

ターデ、ハンブルク)の輸入量を、バウマンの推計にもとづいて、可能なかぎり整理してみよう。

(一) 一五六四年、エムデン エムデン在住英貿易商の文書にもとづくアントウエルペンの特別代理人の報告によれば、毛織物を積んだ三隻の英船がすでに六四年四月にエムデンに入港しているが、主力船団(商船四五隻余と護衛艦三四隻)は前述のように五月二三日に入港した。イギリス側の報告では、その積荷は白地と青地の広幅織毛織物五万反(ショートクロス)と青地と緑地のカージー織三万五、〇〇〇反で、これはショートクロスに換算して約五万八、〇〇〇反に相当するといふ。この年には、前表からみて、ロンドン港からの輸出の大部分がエムデンへ送られたといつてよいであろう。

ちなみに、イギリスの毛織物は、関税徴収のために重さを測ってショートクロス(二三—二五ヤード、平均二四ヤード)

ド)に換算され、ショートクロス二反当り六シリング八ペンスの関税を課せられていた。この手続きはエムデン、ハシブルク、シュターデのほかニュルンベルクでも同じである。カージー織は三反が<sup>カーシー</sup>クロスというのが標準換算率であった。<sup>(2)</sup>イギリス側の輸出量も、船山氏によればショートクロスに換算した数字であるという。

(二) 一五六九—七八年、ハシブルク マーチャント・アドヴェンチャラーズは一五六八年夏に四隻の船(とハシブルク船一隻)をエルベ川に派遣したが、翌六九年には五月に二八隻(二三隻がマーチャント・アドヴェンチャラーズ、三隻がハンザ商人、二隻がイタリア人の船)の毛織物船団が七隻の護衛艦とともに、また、九月に二五—三〇隻(ハンザ船を含む)の第二の船団がハシブルクに入港した。パウマンは、この二つの船団の積み荷の毛織物を六—七万クロス、金額にして三一〇万リユーベック・マルク相当分(約三五万六、五〇〇ポンド・スターリング)と推定している。七〇年春にも五〇隻の船団が入港した。七—七六六年間の入港は不明で、七七—七八年間に三七隻が入港した。<sup>(3)</sup>

この期間には、ハシブルクからのイギリス毛織物の再輸出量(未仕上げ白地)とハシブルクでの染色量が判明している。再輸出量は年平均二万七、〇〇〇クロス(一五六九—七一年間は年平均約四万クロス、七—七八年間は年平均約二万一、〇〇〇クロス)、染色量は年平均約一万四、〇〇〇クロスである。

(三) 一五七九—八七年、エムデン 一五七九年に約三万クロスを積んだ英船団(船数は不明)が入港、八三年夏には、五隻(積み荷量は不明)が入港した。八四—八七年の四年間には、ハーゲドルンの推定では、合計一二一隻<sup>(4)</sup>(組合員の船が一〇三隻、非組合員の船が一八隻)の英船が入港、その積み荷は年平均旧毛織物約四万クロス、カージー織とベーズ織一万反であった。

(四) 一五八七—九七年、シュターデ 一五八七年に一二隻の英船と護衛艦二隻、外国船四隻、八八年に六月に三六隻、十一月に二〇隻、別に一隻の合計五七隻、九〇年に五月に一船団、九一年に春に一船団、秋に二隻と護衛艦一

隻の船団、九二年に一月と八月に二船団、九六年に数隻、九七年に五月に組合員の大船一〇隻と非組合員の荷を積んだ四隻、十一月(?)に組合船八隻と非組合船四隻が入港した、という記録がある、リプスンは、アドヴェンチャライズが九六、九七年に六万〇三一八クロスをロンドンからシュターデへ輸出した、と述べている。なお、前述したように、一五九七年八月一日に帝国勅令が布告されたため、三か月の猶予期間内に旧毛織物ワールとカーギー織合計二万八、〇〇〇クロス以上がシュターデで売られたことが、シュターデ在住のアドヴェンチャラーから本国へ報告されている。<sup>(5)</sup>

(五) 一五九八—一六〇一年、エムデン 一五九九年七月に六隻の船団が三万—四万クロスの毛織物を積んで、一六〇〇年に六月に八隻と九月に九隻の二船団、別にロンドンから一隻、ハルから二隻入港した、関税記録によれば、積み荷の毛織物はこの年の第4・四半期だけで一万四、二六三 $\frac{1}{2}$ クロスであった。この他に、一六〇一年三月に最後の船団が入港したという報告もあるが、詳細は不明である。

(六) 一六〇一—一一年、シュターデ 一六〇一年にロンドンから四月に八隻(うち三隻は非組合員の積み荷)、八月に九隻(うち四隻は非組合員の積み荷)の二船団が入港した、積み荷は合計約四万クロス。別に秋にハルから一隻が入港、積み荷はノーザン・カーギー織三〇〇反。<sup>カーギー</sup>翌二年にはロンドンから三船団、合計二〇—二二隻(二月に四隻、五月に七隻、一〇月に九隻、積み荷は五万六、〇〇〇—五万五、〇〇〇クロス、金額はハンザ側の評価で四五〇万リユーベック・マルク(約五二万ポンド・スターリング)。別に四月と一〇月にハルから一隻ずつ、積み荷は、合計約三、〇〇〇クロス。それ以後の入港船の数は合計して、一六〇三年に二〇隻、〇四年に一九隻、〇五年に一一隻(以上)、〇六年に二三隻で、その後は〇七年に五隻(以上)、〇八年に七隻(以上)、一〇年と一一年に合わせて六隻、と減少している。

表2. ドイツへ輸入されたイギリス毛織物の量

1598 年	43,000 反 (ピース)
99 年	30,000~40,000 ♫
1601 ♫	44,000 ♫
02 ♫	50,000 ♫ (55,000~58,000)
03 ♫	38,000 ♫
04 ♫	47,000 ♫
06 ♫	65,166 ♫ (55,858 ♫)
14 ♫	56,046 ♫ (46,278 ♫)

W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 136.

ところで、シュターデに入港した英船については、その就航の状況を伝える二人の代理商の手紙が残っている。

ジョン・モーレイ (John Morley, シュターデの代理商) が本国の主人ラン  
ドール・マニング (Randall Mannyng) に報告した元帳<sup>レジャ</sup>には、一六〇一年か  
ら〇五年までの間にシュターデに入港した英船二三隻<sup>(6)</sup> (全部ではない) の船  
名と船長と入港日が記されている。それによると、この五年間に一隻は六  
回、二隻は五回、三隻は四回、三隻は三回、六隻は二回、八隻は一回入港し  
ている。また、年二回 (春と秋) 入港した船が延べ九隻ある。

同じく代理商のリチャード・ロウストーム (Richard Rawstorn) が本国の  
主人ライオネル・克蘭フィールド (Lionel Cranfield) へ宛てた手紙による  
と、シュターデに入港した英船のなかには、ミドウブルフからカーギー織を積んで来港し、新しい荷を積んでロシ  
アへ向かった船 (一六〇三年四月) や、注文を受けて二〇反<sup>ピース</sup> (カーギー織であろう) を積んでスペインのセビーリヤへ  
向かった船 (一六〇五年一〇月、アルカニア号) もあった。<sup>(7)</sup>

一六世紀末から一七世紀初めにドイツ (エムデンとシュターデ) に輸入されたイギリス毛織物の量を、バウマンは次  
のように推定している。ロンドン港からの輸出のうちドイツと低地地方へ向かった分を七〇%と仮定し、次に、一六  
〇六年と一四年の数字にもとづいて、そのうち平均六〇%がドイツへ輸入されたと仮定すると、ドイツへ輸入された  
イギリス毛織物の量は、表2のように、年四万—六万クロスとなる。

この数字について二つの点を補足説明しておく。第一に、右の数字はイギリス人商人によってドイツへ輸入された

量で、この他に外国人商人による分があった。外国人商人によるイギリス毛織物の輸出シェアは、前述したように、一五世紀半ばの四五%から一六世紀半ばの二八%へと大きく減少し、一五九八—一六〇〇年に五・一四%、一六〇一年に三・五%、一六〇二年に四・二八%、一六〇三年に二・五七%であった。

第二に、イギリス人によるドイツへの毛織物輸出には、この時期には組合員であるマーチャント・アドヴェンチャラーばかりでなく、特権をもたないもぐりの貿易商つまりインターローパー（非組合員）も従事していた。同じ船にアドヴェンチャラーの荷とインターローパーの荷がいつしよに積まれていたり、アドヴェンチャラーが特権貿易商としての自分の輸出分の荷の他に、もぐりの荷を積んでいたりした例もあったということで、両者のシェアを正確に判別することは極めて困難である。バウマンの推定では、<sup>(8)</sup>インターローパーのシェアは、一五八四—一八七一年に一七・五%、一五九七一年に三一%、一六〇一年に四一%と、こちらは増加の傾向を示している。一般的には、アドヴェンチャラーの船は一六〇—二〇〇トンぐらいで、インターローパーの船（八〇—一〇〇トン）のおよそ二倍の積載量であった。また、一五九八年ミカエル祭で終る一年間にロンドン港からの輸出量一〇万七、七一五クロスのうち、アドヴェンチャラーの輸出量は六万二、九八〇 $\frac{1}{2}$ クロス、インターローパーの輸出量は八、三四六 $\frac{5}{6}$ クロスであったという。後者は総輸出量の七・九%、アドヴェンチャラーの輸出量の二三・二%である。

2 イギリスから輸入した毛織物の染色・仕上げ。一五六〇年代まで 前述したように、一六世紀に増加したイギリス毛織物の輸出は、大部分が未仕上げの、白地広幅織の毛織物<sup>ウール</sup>で、その仕向先は主としてアントウェルペンであった。つまり、イギリス毛織物は未仕上げという半製品の状態で、低地地方へ輸出されていたわけである。とすれば、アントウェルペンへ輸出されたイギリスの未仕上げの毛織物は、どこで染色・仕上げを施されていたのだろうか。半製品の状態で輸入したイギリスの毛織物を完成品に仕上げて消費地へ送り出していた、大陸（低地地方とドイツ）の染



色・仕上げ業に目を向けることにしよう。

低地地方で反乱（「オランダ独立戦争」）が勃発する一五六〇年代までは、ブラバント（南ネーデルラント）のアントウェルペンが、イギリス毛織物の染色・仕上げにおいて独占的といつてよいほどの地位を保っていた。一六世紀の初めまでミドウルブルフやベルヘン・オブ・ゾームへも来港していたイギリスの毛織物船団が、前述したように、一五三六年から直接アントウェルペンへ入港するようになったのも、この町の染色・仕上げ業の隆盛のため、といわれている。

一五六〇年代初めまでに毛織物の仕上げに従事する親方と職人が一、六〇〇人にもなったことは前述したが、それにもまして、不熟練労働者の増加がいちじるしく、それが職人の手間賃を引き下げ、染色・仕上げ業の労働条件を悪化させていたようである。信仰の問題と並んでこの点も、染色・仕上げ職人のドイツへの移住の原因であった、といわれている。

一例にすぎないが、メダー（Meder）という商人の帳簿によると、イギリス毛織物「クロス」の仕上げの費用は、一五五〇年頃に四—五 $\frac{1}{2}$ フランドル・ギルダーであったが、七四年に上等の毛織物で二ギルダー二グロッシェン二ペンス、カージー織は六三年に一カージーが四グロッシェンであった。また、染色料は一五五一年に平均一四フランドル・ギルダー（最高は黒染めの二二ギルダー、最低は黄染めの六ギルダー）であったが、七四年に上等の毛織物の黒染めで六フランドル・ポンド、カージー織は六三年に一カージーが緑染めで六ギルダー、赤染めで四ギルダーであった。一般的にいつて、毛織物の卸商人は売上げの一六—二五%を染色のために支出したといわれ、また、一六世紀を通じて完成品に仕上げるまでの費用は卸売価格の二〇—五〇%であった、といふことである。<sup>(9)</sup>

アントウェルペンの染色・仕上げ業には到底及ばなかったが、ドイツの都市でも、イギリス毛織物を取り扱ってい



表 3. ハンブルク市のイギリス毛織物染色量

1554—55 年	6,208 クロス
1559—60 〃	5,071 〃
1560—61 〃	4,759 〃
1561—62 〃	4,085 〃
1562—63 〃	4,204 〃
1563—64 〃	3,381 〃

W. -R. Baumann, *op. cit.*, p. 42 より。

たハンザ都市を中心にして、イギリス毛織物の仕上げが行われていた。

ケルンではすでに一五世紀に、フランクフルト・アム・マインの大市が近づくとも織物の「けば立て」(napping)と「剪毛」(shearing)が忙しく、雇職人の数を二人から四人にふやす許可を市参事会から獲得したという。イルジークラーによれば、イギリス毛織物の輸入量は、一五〇〇年頃に年三、六〇〇—五、〇〇〇反<sup>ドイツ</sup>ぐらいであった。一五五三年と五四年に市参事会は染色・仕上げの規則を定め、五九年には、市が費用を負担して染色業者を一人ヴェーゼルから連れてきている。<sup>(10)</sup>

ハンブルクでも一五三〇年に、織元とイギリス毛織物を取り扱う商人がアントウェルペンの染色業者と仕上げ業者の二人と契約を結んで、イギリス毛織物の染色・仕上げを始めた。見本の商品をアントウェルペンで買うために、染色業者には、三〇〇グルデン、仕上げ業者には一〇〇グルデンが与えられ、二人には仕事場が提供された、毛織物商は、仕上げのために毎年四〇〇クロスのイギリス毛織物を供給することを約束した。この毛織物商と織元の記録によれば、一五三五年—三六年に六一四クロスが染色され、その量は五四年—五五年には六、二〇八クロスと一〇倍余に増加している。その後の染色量は表 3 のとおりである。この間、染色業者は六三年までに五人にふえ、仕上げ業者は四七年に一二名でギルドを結成している。<sup>(11)</sup>

その他、ブレーメン、ブラウンシュヴァイヒ、エムデン、フランクフルト、リユーベック、ミュンスター、ニュルンベルクでも、イギリス毛織物の染色と仕上げが行われていた記録がある。マーチャント・アドヴェンチャラーズ組合がドイツに指定港を移すに当たっては、立地上の優劣や政治的・宗教的事情と並んで、染色・仕上げ業の存在も選択

肢になっていたことは疑いない。しかし、ドイツでイギリス毛織物の染色・仕上げ業が急速に発展して、アントワールペン（ブラバント）の独占を崩すのは、六〇年代以降に低地地方から染色・仕上げ業者の来住（「信仰の亡命者」）を迎え入れてからである。

なお、イギリス毛織物の染色と仕上げについては、念のため次の二点を補足しておこう。

(一) 染色と仕上げを施されたイギリス毛織物は、ドイツ（やスイス、オーストリア、イタリア）では貴族と都市の上流・有産市民の間で好んで使用されていたぜいたく品であった。一六世紀に出された衣服の華美を禁止するドイツ諸都市の法令の中で、「イギリス毛織物」（“English cloth”, “London cloth”）の使用がたびたび制限されていることが、これを物語っている。パウマンが著書の中で紹介しているが、<sup>(12)</sup>フランクフルト市の会計簿にもとづいたレルナー（*Rechner*）の比較は興味深い。すなわち、一五二〇年にイギリス毛織物一エレの価格（卸売価格であろう）は当地の通貨で一三五ペンス（一メートル当り二四五ペンス）で、これはハム一四キロ、バターか蜂蜜一一キロ、豚の脂一二½キロ、シナモン三三五グラム、アウクスブルク製のバルヘント（ファステイアン）織九メートル、蹄鉄三〇個、当市の濠掘り人の日給一三½日（約二週間）分に相当したという。また、一五五八年にダンツイヒのある商人は、ロンドンで彼の持船を毛織物三六反と交換したという。

(二) 毛織物の染め色では、ニュルンベルクとケルンの記録から見ると、一五世紀末までは濃淡さまざな赤、緑、青など明るい、鮮やかな色に染めることが多かったが、一六世紀に入るとスペインの風俗がドイツで流行し、うすい、暗い色に染めることが多くなる。一四二六―四二年のケルンの毛織物会館の記録では、染め色が判明する五八八½反のうち濃淡含めて赤が六五%に対して黒は四%にすぎないのに、一五〇年ほどのちの一五八三―九一年のブレーメンのある染色業者の帳簿では、一五八三―八九年間に染色された一九六六反のうち流行色の黒が八一・四六%

に対して赤は、四・一五%にすぎない。<sup>(13)</sup> 染色の流行が大きく変ったのではないかと思われる。一六世紀以降、流行の黒染めのベースとなる青染めの染料として、伝統的な大青に代ってインジゴ（藍）<sup>（あ）</sup>が普及するが、これについては後述することしよう。

3 ドイツの染色・仕上げ業の発展 ドイツの諸都市におけるイギリス毛織物の染色・仕上げ業は<sup>(14)</sup>一六世紀後半に急速に発展して、ブラバント（アントウエルペン）の独占を崩したが、その主な原因は、(一) マーチャント・アドヴェンチャラーズがアントウエルペンを撤退して、指定港をドイツへ移したこと、(二) 南ネーデルラントを逃れた染色・仕上げ業者（「信仰の亡命者」）がドイツの諸都市へ来住したこと、であった。特に後者の影響は大きい。以下、主要な都市について見ていこう。

エムデン イギリス毛織物の指定港となったドイツの三つの都市のうち、エムデンでは、南ネーデルラントからの亡命者が来住するまでは、織元だけがギルドを作り、仕上げの作業も織元が行っていた。亡命者が来住したのは、一五五三年から五四年で、第一波（一五四八―五〇年）の亡命者のうち、いったんイギリスへ渡った者がメアリ女王の新教禁止令（一五五三年）のためにエムデンへ来住したようである。その影響が表れたのであろう、早くも五五年にエムデンの活況を調査するために、アムステルダム市参事会が二人の密偵をエムデンに送っている。その報告によると、エムデンにはイギリス毛織物用の張り枠<sup>（デンッ）</sup>が三台、染色場が二軒、仕上げ場が一軒あり、イギリス人の卸商人が在住していた。

亡命者の第二波が始まると六七年に多数の商人が来住し、「六七年には来住者は旧市民の三分の二に達した」といわれている。エムデンにおけるイギリス毛織物の染色・仕上げの数量は不明であるが、パウマンは、エムデンの商人が毎年五〇〇―二、〇〇〇クロスの染色・仕上げずみの毛織物をフランクフルト・アム・マインへ送っていた、と述

べている。九〇年代には一三のギルドの中に織布工ギルドとけば立て工ギルドがあつて、前者は最大のギルドの一つ、後者は序列第一位であつた。<sup>(15)</sup>

ハンブルク ハンブルクの商人の中には以前からアントウエルペンを通して対英貿易を行っていた者がいたが、前述のように(注11)、彼らは一五三〇年にアントウエルペンから染色業者と仕上げ業者を一人ずつハンブルクへ連れてきた。これが、アドヴェンチャラーズの指定港であつたアントウエルペンの独占から独立する第一歩であつた。一五五三年、五四年にはシュレーダー(Jakob Schröder)という商人がアントウエルペンの代理商を通して未仕上げのイギリス毛織物を買付け、これをハンブルクで染色・仕上げしている。五〇年代には毛織物の染色・仕上げ業は、醸造業と並んでハンブルクの重要産業になっていた。染色業者の数は一五六三年に五人、以後しだいに増加して一六一一—一二年に一五人になった。仕上げ工は一五四七年にギルドを結成した時に親方一二人であつた。<sup>(16)</sup>

南ネーデルラントからの亡命者の来住は一五六六—七〇年にその数をまし、特にアントウエルペンが陥落した八五年から八九年にかけては「洪水」のように流入した。市民の四分の一に達したという。来住者を迎えてハンブルクでは対イベリア(アジア、アメリカ)貿易や対ドイツ商業が盛んになり、ドイツ最初の取引所が開設され(一五五八年)、海上保険や銀行業も発達し、ドイツの都市の中でアントウエルペンの遺産の最大の継承者となった。一五世紀末に一万二、〇〇〇—一万四、〇〇〇であつた人口が一六世紀末に四万(一七世紀末には六—一〇万)に増加したことが、ハンザの「盟主」リユーベックやケルンと対比してハンブルクの隆盛を物語っている。<sup>(17)</sup>

パウマンは、第一次指定港時代(一五六九—七八年)を含む一五六三—一六二二年間にハンブルクで染色された毛織物のうち、検査を受けてシールを貼られた合格品の量を表示している、それによると、第一次指定港時代に平均一万四、〇〇〇クロス余(それ以前は最高で八、〇〇〇クロス程度)に達し、以後もだいたい年平均一万二、〇〇〇—一

万五、〇〇〇クロスの間を推移している（最高は一五八七、八八年の合計三万九、二六〇クロス、年平均一万九、六三〇クロス）。前述したように、これはハンブルクへ輸入されたイギリス毛織物の三五—四〇％程度で、残りの六〇—六五％ほどが未仕上げのまま再輸出され、別の都市で染色・仕上げを施されていた。

ハンブルクがルター派の町であったことから、カルヴァン派の来住者との間にトラブルが生じたことは前述したが、それとは別に、この当時染色業に起こっていた「悪魔の色」（Teufelfarben, devils colours）をめぐるトラブルがハンブルクでも起こっていた。織物の染色で使用を禁止された染料があったのである。公認の伝統的な大青（Woad）に対して市参事会と毛織物商が禁止した染料は、没食子（五倍子）（gall）、ぬるで（sunac）などで、インジゴはハンブルクでは禁止されていなかったようである。しかし、一六一一年になると市参事会は没食子を使った黒染めを許可しており、二一年には大青染めの業者八人に対して没食子染めの業者が一〇人であった。

**シュターデ** シュターデは早くから宗教改革を受けいていたが、一五七七年以降低地地方からワローン人が来住し、八八年にはワローン人の地区が、九一年にはフランドル人の地区ができた。来住者の多くは毛織物の仕上げに従事し、織布工ギルドには四〇〇人のけば切り工<sup>シニアラ</sup>がいたこともあったという。一六〇五年に市長は二人の染色業者に深紅色とコチニール染色の特権を与えており、市壁の外のシュヴィンゲ川沿いには染色場もあった。イギリス毛織物の指定港であった時（一五八七—九七、一六〇—一二年）にはイギリス人商人もアントウェルペンから来住した。

シュターデの染色・仕上げ量は記録が焼失して不明だとされている。断片的な事実であるが、ハイルブローンのオルト（Ort）商会とブラウンシュヴァイク市参事会はシュターデで未仕上げの毛織物を買いつけて、ハンブルクで染色・仕上げさせており、一方、ライプツィヒの商人シュマルツ（M. Schmarz）は一六〇〇年にイギリス毛織物一、〇〇〇クロスをミッドウルブルフで買って、シュターデとハンブルクで仕上げさせた。一五九七、一六〇一、〇二年の三

年間の平均では、輸入した毛織物のおよそ三五%が未仕上げのままハンプルクへ送られていた。

シユターデは一七世紀の初めまでは商業都市としてハンプルクと拮抗していたが、その後は、ハンプルクの隆盛とは逆に衰退した。エルベ川の流れが東へ移動したこと、三〇年戦争中、一六二八年と四五年の二度、包囲攻撃を受けたことが不利に作用した。<sup>(18)</sup>

以上の三都市は指定港であるが、イギリス毛織物の染色と仕上げは指定港以外の都市でも行われていた。そのなかから四つの都市を選んで述べることにしよう。

ブレーメン 一五七〇、八〇年頃ブレーメンには四、五人の染色業者がいたが、その一人ファルバー (Tomes Farwer) は、一五八三—八九年の七間にイギリスの紡毛織<sup>フレイケン</sup>一九六六クロスとカーギー織、ベイ織など一八三<sup>1</sup>/<sub>2</sub>反を染色している。紡毛織のうち一八七九クロス (九五・五七%) は黒、赤、紫、トーニー、灰色の五色で (残りの八七クロスは二色)、特に流行の黒染めは一六〇—<sup>1</sup>/<sub>2</sub>クロス (紡毛織の八一・四六%、五色の八五・二%) と断然多い。ファルバーはその他にドイツ製の毛織物の染色もしており、染色料として現金の他に染料、色留め材、食品 (牛、バター、蜂蜜) も受取っていた。

ファルバーが染色したイギリス毛織物については、注文主の商人名が判明している。紡毛織<sup>フレイケン</sup>は六六人で、うち四六人 (七〇%) が二〇クロス未満 (うち約八〇%は一〇クロス未満) の小口注文主であるが、四七八<sup>1</sup>/<sub>2</sub>クロス、一九五<sup>1</sup>/<sub>2</sub>クロス、一八一クロスという大口の注文主もいる。バウマンによれば、注文主の商人はすべてブレーメン市民であるが、そのうち六人は低地地方からの来住者である。六人の来住者のうち四人が二〇クロス以上を注文しているが、特にウォルターズ (Steven Wolters) は紡毛織<sup>フレイケン</sup>四七八<sup>1</sup>/<sub>2</sub>クロス (二四・三%)、カーギー織など一六反<sup>ビリス</sup> (六三%) と、最大の大口注文主であった。



ブレーメンでは仕上げ工はギルドを作っていたが、一七世紀の初めには、フランクフルト、ライプツィヒ、ナウムブルクの大手の直前になると仕事ができるために、日曜日や祝祭日にも仕事をする許可を要求している。織物を乾燥する張り枠が七〇台以上あったという。<sup>(19)</sup>

フランクフルト・アム・マイン 一五九〇年代にリールから来住したデル・ヴァルト (Johann del Wart) が市の染色場を賃借して毛織物の染色を行っており、ケルンからの来住者も加わって一七世紀初めに染色業者は二〇人にふえ、染色量は五万クロスに達した。この頃が染色業の繁栄の絶頂で、ハンブルクの商人がイギリス毛織物をエムデンで買付け、フランクフルトで染色・仕上げをして当市とカッセルで売った、という記録が残っている。しかし、その後衰退したのは、ハンブルク、アムステルダム、ダンツィヒなどに比べて新技術の導入に遅れたことや、仕上げ業者に対する規制、インジゴの使用禁止などのためだといわれている。<sup>(20)</sup>

ケルン アントウエルペンに近く、取引関係が早くからあったケルンでは、すでに一五五四年に市参事会がイギリス毛織物の染色と仕上げに関する規則を制定している。五九年にはヴェーゼルから市の費用で染色工を連れてきており、六〇年代には多数の仕上げ工が低地地方から来住した。

しかし、ケルンでは染色と仕上げはそれ以上発展せず、八〇年代頃から衰退に向かったようである。一五八二年のある報告は、毛織物の多くはいまではケルンで仕上げられず、染色だけされっていると述べており、一六〇七年には、毛織物の多くはすでに仕上げられた状態で輸入されている、と染色工やけば立て工が不満を表明した。衰退の原因は仕上げ技術の不足、「百分の一ペニー税」の導入、市参事会による規制などで、たとえば、一五九七年に市参事会は「偽りの腐食した染色」「悪魔の色」の使用を禁止している。<sup>(21)</sup>

ニュルンベルク 内陸部南ドイツの帝国都市ニュルンベルクでは早くから毛織物生産が盛んで、絶頂期の一五三八



年の生産量は検印税の税収から推定して一万四、二五〇反に達したが、東欧（ハンガリー）市場の喪失などの影響で四七年には約八、六〇〇反、七〇年には一、六五〇反に落ちこんだという。<sup>(22)</sup>この一五七〇年代から、同市の毛織物工業の中心は織布から染色・仕上げへ転換していくが、ニュルンベルクがイギリス毛織物の染色・仕上げを開始したのはちょうどこの時であった。そのいきさつは次のとおりである。

低地地方に反乱が起こってアントウェルペンの商業が閉塞し、そのためにイギリス毛織物をハンプルクへ送って仕上げを施している、という情報を聞いて、市参事会はイギリス毛織物の染色・仕上げ業を導入することを決め、ヘント（ガン）から来住したデ・ボイス（Jan de Boys）をアントウェルペンへ派遣した。一五六九年のことである。デ・ボイスは染色業者（J. Doppengießer, G. Herve）と仕上げ業者（A. vons Berg, Ph. de Fett）を二人ずつ連れて来たが（五月）、四人はペグニッツ川の水を「口に含んで吟味して」アントウェルペンやハンプルクに劣らない染色ができることと明言した、ということである。六月に市参事会は四人と契約を結び、染色場の建設、乾燥場の購入、設備・備品の製作や注文を進める。一方、四人はいったんアントウェルペンへ帰って家族と職人二六名を連れて戻り、別に数名の手工業者も来市した。染色・仕上げ業を導入するために市参事会が支出した金額は、全部で一万一、〇〇〇—一万二、〇〇〇グルデンと推定されている。<sup>(23)</sup>

最初の染色布は八月に仕上がり、品質は非常に良かった。染色業は順調に進み、一〇年目の一五七八年には五人の親方染色業者でイギリス毛織物約四、〇〇〇クロス、カーギー織約一万二、一二〇反<sup>（ビーズ）</sup>を染色した。カーギー織三反を毛織物一クロスと換算すると、合計八、〇四四クロスとなり、ドイツへ輸入されたイギリス毛織物の二割程度ではないかと思われる。染色料を一クロス平均八グルデンとして、五人で年六万四、〇〇〇グルデンの収入である。十六世紀末からカーギー織の染色量が減少するが、これは、トルコの脅威や宗教紛争のほか特にシュレージエン織物工業

表 4. イギリス毛織物の染色・仕上げの費用 (1569 年)

	ギルダー	シリング	ペンス
染色料 (平均)。J. Doppengießer へ	6	3	6
仕上げ料。A. vom Berg へ	2	0	0
補修, 縮絨, その他	1	11	10
合 計	9	15	4

W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 94.

表 5. 染色・仕上げの費用の比較 (1570 年代)

	ニュルンベルク			アントウェルペン		
	ギルダー	シリング	ペンス	ギルダー	シリング	ペンス
染 色 料	17	0	0	27	8	7
仕 上 げ 料	7	18	8	9	12	2
そ の 他	1	8	0	0	17	0
合 計	27	6	8	37	17	9

W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 95.

の競争によるものであった。

未仕上げのイギリス毛織物は主としてイギリス人その他の外国人によって輸入されていた。したがって、関税のト  
ラブルで輸入が止まった年（たとえば一五七九年）には、染色場と仕上げ場は仕事がなくなった。仕上げ業者のデ・  
フェットは陳述している。<sup>(24)</sup>「イギリス人が関税によって追放されると仕上げ業は衰えるだろう。というのは、地元の  
市民は染色のために十分な量の商品を輸入していないからだ。」

これに対して、イギリス人には染色・仕上げを施した完成品の毛織物の取引は許されていなかった。完成品として  
輸出されたイギリス毛織物の関税記録（一五八〇年）に  
よれば、輸出商人二六名はすべてニュルンベルク市民  
で、そのうち一五名は自分の計算で、一〇名は他の都市  
の商人の代理商として、輸出に携っていた。前者の一五  
名の中には、ドイツ最大の麻織物問屋となるバルトロメ  
ウス・ヴィアティスの名前もある。<sup>(25)</sup> また、後者の一〇名  
のうち七名はアウクスブルクの商人の代理商をしてお  
り、アウクスブルクの商人はニュルンベルクで染色・仕  
上げされたイギリス毛織物の三分の一ぐらいを輸出して  
いたのではないかと思われる。

仕上げ業も盛んになり、親方仕上げ工の数は一五六九  
年の三人から八七年には一四人にふえた。その中には

デ・フェットのように、多数の職人を雇っていたばかりか不動産を購入し、若い貧しい親方に仕事を与える前貸制を始めていた有力者もいた。市参事会は七一年に仕上げ工の要求をいれて、彼らのギルドの規則を作り、新規に加入する親方の納入金の金額、雇ってよい職人と徒弟の数、労働時間の上限などを定めた。

一五六九年にデ・ボイスが初めてハンブルクからイギリス毛織物四<sup>パルク</sup>柵（二柵は一〇反）を持込んで染色・仕上げをした時に、それにかかった費用は表4のように一パルククロス当り九ギルダー一五シリング四ペンスであつた。染料の値上りで染色料は高騰したが、それでも七〇年代に、同じ長さ、同じ値段の上等の毛織物一クロスの黒染めの場合の費用を比べると、表5のように特に染色料において、アントウエルペンよりニュルンベルクの方がずっと安かつた。

以上のように、マーチャント・アドヴェンチャラーズの指定港がドイツの都市に開設された。五六〇年代以降、低地地方から来住した職人たちを迎え入れてドイツでも、ブラバントの独占を崩してイギリス毛織物の染色・仕上げ業が發展することになった。右にあげた都市のほか、ゴッホ、カッセル、リユーベック、リユーネブルク、ミュンスター、ヴェーゼルなどでも確認されている。これらの都市では、染色はギルド制の枠外で行われていたが、仕上げ工はギルドを結成していた所が多い。また、領邦君主の中にも、ザクセン選帝侯、ヘッセン方伯、バイエルン選帝侯のようにこれを奨励する者が現われた。ただし、こうした上からの試みはおおむね失敗したようである。

この新産業のその後については、都市の立地、商人の資金力と国際的指向、来住した職人に対する寛容度、市当局の姿勢などのい<sup>い</sup>かん<sup>かん</sup>によって、都市の間に大きな違いがあつた。結局、ドイツにおけるイギリス毛織物の染色・仕上げ業の中心はハンブルクとニュルンベルクになり、両都市ともそれぞれドイツへ輸入されたイギリス毛織物の三〇—

四〇%ぐらいずつを仕上げていたと思われる。

# 注

- (1) 船山栄二、前掲書、一八、一九ページ。
- (2) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 113, note 8.
- (3) この間一五七一―七四年にはエムデンにもイギリス船が入港している。一五七一年に一三隻、七二年に三隻、七三年に五隻、七四年に五隻。七二年の三隻の積み荷は約三、〇〇〇クロス。なお、七一年の二三隻は非組合員（インクローブ）の船ではないか、とパウメンは述べている。W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 117.
- (4) B. Hagedorn, Betriebsformen und Einrichtungen des Emden Seehandelsverkehrs, in: *Hansische Geschichtsblätter*, Bd. 16, 1910, S. 527.
- (5) E. Pitz, Die Herzöge von Braunschweig-Wolfenbüttel und der Tuchhandel Nordwestdeutschlands im 16. Jahrhundert, in: *Hansische Geschichtsblätter*, Bd. 99, 1981, S. 87 f.; E. Lipson, *The Economic History of England*, 1931, 2, p. 209; W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 121.
- (6) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 134, Table 17.
- (7) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 133. この二隻のうち、ミドウルブルフから来港してロシアへ向かった船は前注の記録（表）に載っていない。また、セビーリヤへ向かったアルカニア号（船長ロジャー・グンストン）については、一六〇四年に二度（七月と十二月）入港したことが載っている。
- (8) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 142.
- (9) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 39.
- (10) F. Irsiegler, Die wirtschaftliche Stellung der Stadt Köln im 14. und 15. Jahrhundert, in: *VSWG*, Beiheft 65, 1979, S.65; W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 41.
- (11) ポステル (R. Postel) は、イギリス毛織物の染色・仕上げという新産業のハンブルクへの導入について、次のように述べている。宗教改革が実施されて力をつけてきた対英貿易商人 (Englandfahrer) は一五三〇年に、市参事会および商人の長老といっしょにアントウェルペンの染色業者と仕上げ業者 (Wandbereiter) の二人と契約を結んで導入した。仕上げ業者

(Wand Schneider)は対英貿易商人といっしよに、後には自分たちだけで新産業を監督して、Stalgeid(市内の営業者から徴収した税金)の収入を増加させた。仕上げ業者の数は次の三〇年間に三、名から五七名に増加した。W. Jochmann u.H. D. Loose (Hrsg.), *Hamburg, Geschichte der Stadt und ihrer Bewohner*, Bd. I, S. 232 f.

(12) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 20.

(13) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 29. ケルン市民フィーホフ (Gerhard von dem Viehof) がパートナーを通して一四三七—三九年に輸入したイギリス毛織物二、四反についても、そのうち八二%が高価な赤と緑であったという。

(14) 染色・仕上げの作業工程について一言しておく。織られた布は縮絨場 (fulling mill) へ運ばれて縮絨 (cleaningfelting) を施される。布は五分の一ないし三分の一ほど縮み、厚く・目がつまつた・丈夫で水や汚れに強いものになる。イギリス毛織物の縮絨はイギリスでも大陸でも行われたようである。次に染色場で染色 (dyeing) され、仕上げ場では立て (napping)、けば切り (shearing) を行い、よく洗って張り枠 (tenter) に張って乾燥させる。最後にプレスしてつや出し (dressing) をする。ブレーメンやケルンではだいたいこの順序で仕上げ作業が行われていたが、ハンブルクやミュンスタールでは、けば立て、けば切り、張り枠での乾燥のあとで染色が行われたようである。

(15) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 44—46; 諸田「信仰の亡命者—ドイツ経済史への影響—」(『商経論叢』二四—)、七五、七八ページ。ドイツ各地のコロニーにおけるネーデルラント人亡命者の数については、石坂昭雄氏が整理して表示している。石坂昭雄「ネーデルラント人プロテスタントのドイツ亡命とその経済史的意義」(梅津、諸田編著『近代西欧の宗教と経済』同文館、一九九六年、三四—ページ)

(16) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 47—56.

(17) 宗教改革の時代はハンブルクにとって「世界経済への生誕の時」(ヴィスケマン)であった。アイスランド商業の基地となり、一五三七年にヘインフォンドに教会を設立している。エルベ川の航行をめぐる紛争で市の利害を貫徹し、ブランドンブルクの穀物輸送を担当して、東エルベ地方の後背地に対する商業中心地となった。低地地方諸港では入港船数と積荷量においてハンザ都市中第一位であり、アントウエルペンでは入港したドイツ船のうち一五四〇年に九〇%以上、一五五〇年に八〇%以上がハンブルクからの船で、イベリア商業にも進出して香辛料と植民地産品の商業も盛んになった。一五九一年にはリスボンへ輸入された胡椒の半分近く(四八・三%)がハンブルクへ送られている。ノイヴェルク島付近で徴収された関税 (Werkzoll) は、一五三〇年から五〇年までの間に二倍、六〇年までの間に三倍になった。一五五八年の取引所の設立(新しい建物は一五

七七八三年に建設)はドイツで最初、アントウェルペン(一五三二年)・トゥールーズ(一五四九年)・ルーアン(一五五六年)に続いて四番目であった。*Hamburg. Geschichte der Stadt und ihrer Bewohner*, hrsg. von H. - D. Loose, Bd. I, S. 229 ff. 諸田『フッガー家の時代』八五ページ。「ドイツではケルンやフランクフルト以上にハンブルクが商都アントウェルペンの遺産を継承した」という印象をもつ。」R. van Roosbroeck, *Niederländische Glaubensflüchtlinge und die Wirtschaftsentwicklung der deutschen Städte. in: Führungskräfte der Wirtschaft in Mittelalter und Neuzeit 1350—1850*, Teil I, hrsg. von H. Helling, 1973, S. 183. 諸田「信仰の亡命者」七九ページ。

(18) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 57—59.

(19) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 60—66. 一五七七年の「帝国警察令」(*Reichspolizeiordnung*)は、硫酸塩、ぬるで、没食子、インジゴの使用を「悪夢の色」として禁止しているが、一五九七年のブレーメン市の条令はこれを守って、大青以外の染料の使用に、マルクの罰金を課している。これに対して、毛織物商はインジゴの使用を支持し、結局、市参事会もこれを認めたという。

(20) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 67—68. 市の納税者名簿によれば、ネーデルラントからの来住者は一五五六年には人口の五分の一だが、納税者の九分の一、また、一五七八年と九〇年には「人口比では五分の一を越えないが、納税者数では四分の一以上」であった。納税者中に占める高額納税者の比率も、一五七八年フランクフルト人六〇人に一人(ネーデルラント人四二人に一人)、一五九〇年五七人に一人(二五人に一人)、一六一八年四〇人に一人(四・六人に一人)と、来住者の方がずっと高い。「フランクフルトの最初の大銀行家」といわれるフォン・ボデック家は一六世紀半ばにトルンからアントウェルペンへ移って商業と金融業で成功し、多分一五八三年にアントウェルペンから来住した亡命者で、一六〇二—一〇九年間の預託者八五人中五人がネーデルラント人であった。染色業でも、ネーデルラント人は九七の染色桶を使用していたのにフランクフルト人は三しか使用していなかった」ところ。Richard Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger*, Bd. 2, S. 248 ff. 諸田「信仰の亡命者」八〇ページ。

(21) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 70—72. 上流階級の壮麗な邸宅はほとんどすべて来住したネーデルラント人の所有に移った、という報告があるが、アントウェルペンからレイデンとブレーメンに移ったメーレン兄弟の往復書簡(一五八六年)には、ケルンにいる義父の大商人マレバルトが、ケルンはスペインの將軍ファルネーゼに迎合して来住者を歓迎しないので、まもなくフランクフルトへ移るだろう、と記されている。諸田「信仰の亡命者」七八、八〇ページ。



- (22) 佐久間弘展「中世末・近世初期におけるニュルンベルクの毛織物・染色業」(『社会経済史学』五五—三)四三、四四ページ。なお、同「親方問屋主と賃労働者」一四〇—一六三〇年ニュルンベルク」(『社会経済史学』六二—五)も参照。
- (23) デ・ボイスはヘント(ガン)から来住し、一五七七年に市民権を取得した。染色場はSchütt Islandに建設され、長さ七・五メートル、乾燥場は市門Frauentor門の前で、張り枠が三台あった。W.-R. Baumann, *op. cit.*, p. 77, 78.
- (24) W.-R. Baumann, *op. cit.*, p. 87, 88.
- (25) バルトロメウス・ヴィアティス(一五三八—一六二四年)は、一五九一年に有名な「ヴィアティス・ペラー商会」を設立するまでに三つの共同企業に参加した。三つめの企業が「フォルストラング・ヴィアティス商会」で、一五七〇年に期間五年の共同企業として設立され、七五年に契約を更新して八一年まで存続した。もみ革、牡牛、繊維製品などを取扱っていたが、ヴィアティスは二期目の一五七五年頃から、シュレージエンやラウジッツの麻織物工に接触し始めていた。諸田「バルトロメウス・ヴィアティス(一五三八—一六二四)——南ドイツ麻織物商の生涯と遺産」(『商経論叢』一九—二)

### 三 ドイツにおけるマーチャント・アドヴェンチャラーズ——居住・特権・取引

1 指定港都市 イギリス毛織物の輸出先指定港になったドイツの三都市、エムデン、ハンブルク、シュターデには、かなり大勢のアドヴェンチャラーズが居住していた。エリザベス一世の特許状(一五六四年)は、アドヴェンチャラーズが外国で土地と家屋を取得することと現地の女性と結婚することを禁止していたから、アドヴェンチャラーズは賃借した家屋に共住し、食事も共にすることが原則であった。ただし、ドイツ語を習得するために、一年間に限ってドイツ人の家庭に住むことができたようである。

エムデンでは、指定港になった一五六四年にクルンダーブルクにある von Kniphuisen の所有する家屋を借りて集会場とした。この家には二〇人ぐらいのイギリス人が住み、毎朝六時に二階の集会室で礼拝が行われ、一〇〇人以上が会食に集まっていた。イギリス人はほかにも三軒の家を賄いつきで借りており、そのほか市内の民家や宿屋に住



んでいた者を加えると、総勢は四〇〇人ぐらいと推定されている。取引は毎日二回ホエック通りで行われ、毛織物を保管する倉庫としてフランシスコ派の修道院が利用された。休日にはここで英語による説教も行われた。<sup>(1)</sup>

一五七九年にふたたび指定港になった時、アドヴェンチャラーズはまたクルンダーブルクに戻った。家賃は年六〇

〇〇グルデン。このほか von Oldersun の宿屋にも住んでいた。三回目の指定港時代の一五九八—一六〇一年には六〇—七〇人のイギリス人が居住していた。<sup>(2)</sup>

アドヴェンチャラーズは一五六四年五月二七日にエムデンを領有する東フリースラント伯から、イギリス毛織物その他の財貨を領内で関税を免除されて取引する特権を獲得し、<sup>(3)</sup>彼ら自身の集会を開くことを許され、アントウェルペンにいた時と同じような自由を認められた。独自の裁判、使わない時のクレーンの使用料の免除、取引所の開設などの要求は認められなかった。

エムデンに運ばれた毛織物がどのように売られたか、アドヴェンチャラーズの取引については不明な点が多い。一五六四年に初めて来航した時には毎週三日「展示日」を開き、販売はオークションの形式で行われた。この時には、たとえば、自分の勘定でカージー六五一反を運び、代理商を通して売ったジョン・アイシャム (J. Isham) のように三五〇ポンドの欠損を生んだ者や、アイシャムの友人で組合の重役のトーマス・アルデーシー (Th. Aldersey) のように九〇反の毛織物<sup>クロス</sup>を四〇七ポンドで手放した者もあって、アドヴェンチャラーズにとってエムデンへの売りこみは決して有利ではなかったようである。二回目の指定港時代には市況が好転して売れゆきが好調で、イギリス人が望む交易品（上等のシルク、綿織物、麻織物）をイギリスへ持ち帰ることができた。<sup>(4)</sup>

ハンブルクでは指定港になった翌年、つまり一五七〇年に、市参事会がグレニングァー通りのすべての建物を一万〇五〇〇リユーベック・マルクで買いあげて、無料でアドヴェンチャラーズに提供した。カタリナ教会に接する「イギ

リス人の家」と呼ばれ、アドヴェンチャラーズ（カハナ）の長老、書記、職員（オフィシャルス）、管理人、牧師が家族や使用人といっしょにここに住み、会食もここで開かれた。中央の建物の広い部屋が集会場に使われ、礼拝堂は向いの家にあった。商品を保管する倉庫には納屋を使った。

ハンブルクに居住していたイギリス人の数は最初の期間（一五六九—七八年）については判らない。ふたたび指定港になった一六一一年には一〇〇人以上のイギリス人商人が確認されている。一六二〇年には一一人が「イギリス人の家」に居住し、三二組の夫婦が家族とともに一二軒の借家に居住、独身者は八三人で、子供と使用人を含めるとイギリス人の会衆は二二八名であつた。<sup>(5)</sup>

市参事会は一五六七年の特許状によって、アドヴェンチャラーズに大部分の商品を市民なみの低い関税で輸出入することと卸商業を認めた。荷造り人を六人まで雇うこと、市の秤りを使用すること、クレーン<sup>(6)</sup>を無料で使用することも許された。これまで追隨してきた「ハンザの経済政策との衝突」である。二回目の指定港時代にもこの六七年の特許状が基礎になった。

ハンブルク港の関税記録によれば、一六一一—一二年の対英貿易の輸出入品は次のようであつた。輸出品（イギリスからの輸出品）は毛織物のほか毛皮と皮革、鉛、石炭、ビール、酢、海外の産品（ゴム、胡椒、ナツメグ、しょうがなど）。輸出品（イギリスへの輸出品）は繊維品（麻・綿・絹織物、ボンバジン、ベルベット）、大麻と羊毛、毛皮と皮革、金属と金物（銅、真鍮、水銀、薄板、各種の線）、染料と色どめ（みょうばん、あかね、インジゴ、ブラジルすおう）、木材と木工品、ニュルンベルク製の金物、ナイフ、ガラス、ホルシユタイン産の小麦、チーズと胡椒。

ロンドンからハンブルクへ毛織物を輸出していたアドヴェンチャラーズの間では、取扱額は決して齊一ではなかつた。たとえば、一六〇六年には二二九人が輸出に関与していたが、そのうち半数の商人のシェアは輸出総額の一〇

パーセントに満たなかった。またアドヴェンチャラーズの中には、短期間ハンプブルクに滞在しただけで代理商を残して帰国する商人も多かった。<sup>(7)</sup>

シュターデでは一五八七年にアドヴェンチャラーズに対して二軒の家（漁師広場の家と大通りとザンドの角の家）を提供し、そのうち一軒で集会と礼拝と会食が行われた。倉庫には廃墟になった聖ゲオルク教会が使われた。エーレンベルクはホープ商会の帳簿とハンザ側の調査にもとづいて、シュターデに滞在したイギリス人一四八人の名前を明らかにしたが、九七年にイギリス人を追放する帝国令が布告されてからは残留したイギリス人は数名になったようである。<sup>(8)</sup>

市参事会は同じ八七年にアドヴェンチャラーズに特許状を与え、九七年にこれを更新しているが、シュターデ市の特許状はハンプブルクが与えた特許状とほとんど同じ内容であったといわれる。輸入関税はハンプブルクと同じく一反<sup>ツロース</sup>について一リユーベック・シリリング、輸出関税は外国人と同じく三リユーベック・シリリングであった。

シュターデにおけるアドヴェンチャラーズの取引については、イギリスのマニング商会 (Randall Mannyng & Co.) の代理商をしていたジョン・モーレイ (John Morlay) の帳簿 (一六〇一—一六〇五年、つまり二回目の指定港時代) が興味深い事実を提供している。<sup>(9)</sup>

(一) マニング商会は一六〇一年四月から一六〇五年一月まで四年半の間にシュターデの代理商モーレイに各種の毛織物を合計一八八七反<sup>カリス</sup> (カージー二〇を除く)、金額にして一萬八九三三ポンド一三シリリング五ペンスを輸出した。船便ごとの毛織物の種類と価額は表 8 のとおりである。

(二) これに対して、代理商モーレイは各種の絹九〇〇〇ポンド余、各種の麻四三〇〇ポンド余、タフタ (平薄絹) 四〇〇〇ポンド余など、合計二万ポンド余の繊維品を購入してイギリスの主人<sup>マンニグ</sup>に送っている。

表 8 マニング商会がシュターデの代理商に送った毛織物の種類と価額 (1601 年 4 月～1605 年 11 月)

入 港 日	船数 (隻)	種 類 別 の 毛 織 物 の 数 量							価 額		
		Pack- cloths	Castle- combs	Broad- lists	Small- lists	Worce- sters	kerseys (k)	合計(k を除く)	£	\$	d
4 月 20 日	4	80	42			68		190	1,759	10,00	
8 月 8 日	4	38	11			38		87	862	04,00	
1601 年合計		118	53			106		277	2,621	14,00	
2 月 27 日	3	22	14			45		81	915	09,04	
5 月 27 日	3		23			68	20	91	1,156	18,04	
10 月 27 日	8	35	45			140		220	2,417	15,00	
1602 年合計		57	82			253	20	392	4,489	12,08	
5 月 26 日	7	60	57			103		220	2,241	11,08	
6 月 7 日	1	5				5		10	111	10,00	
9 月 22 日	2	30	5			45		80	829	08,04	
1603 年合計		95	62			153		310	3,182	00,00	
1 月 7 日	1	40						40	234	10,00	
5 月 5 日	6	70	51			119		240	2,569	17,00	
7 月 3 日	1					40		40	553	00,00	
7 月 27 日	2	40				10		50	423	13,04	
10 月 11 日	1		10		10			20	153	12,00	
10 月 24 日	3	20	40			10		70	632	14,09	
12 月 9 日	1		6	9		2		17	142	15,00	
1604 年合計		170	107	9	10	181		477	4,708	21,13	
1 月 24 日	1			10	30			40	252	05,00	
4 月 5 日	2	25	35			1		61	464	19,08	
4 月 16 日	1	80		20				100	698	00,00	
6 月 8 日	2					60		60	854	13,04	
8 月 26 日	3	30	40					70	529	01,08	
10 月 29 日	1	10	10			20		40	444	00,00	
11 月 8 日	1		10	20		30		60	688	15,00	
1605 年合計		145	95	50	30	111		431	3,930	24,08	
1601～05 年間 の輸入総計		585	399	59	40	804	20	1,887	18,932	13,05	

W. - R. Baumann. *op. cit.*, p. 159.

(三) このうち、一六〇一年四月二〇日にシュターデに着いた四隻の船荷の合計一九〇反<sup>クロス</sup>（金額・七五九ポンド・一〇シリリング）は、購入価格より五〇パーセントほど高い値で売られたので、輸送費や手数料を差引いてマニングの利益は一<sup>クロス</sup>反当り二ポンド二シリリング（二ハリユーベック・マルク一四シリリング）で、利益は三一パーセントであった。また、この一九〇反<sup>クロス</sup>の毛織物は九四回に分けて売られたが、その支払方法をみると、ブレイメンの商人が現金で購入したのが三回、エムデン製とフリースランド製の麻織物とのバーター取引が六回あったほかは八五回が信用払いであった。組合は六か月より長い信用払いは認めていなかったが、実際には八五回のうち六か月払いは二三回にすぎず、規制に違反して七か月払いが二八回、八か月払いが三四回あった。

2 指定港以外の都市と地域 ロンドンからアントウェルペンへ送られたイギリス毛織物は、染色・仕上げ加工されて、低地地方出身の商人やドイツ人商人の手でドイツの大都市に売りさばかれていた。しかし、指定港がアントウェルペンからドイツの都市へ移った一五六〇年代頃から、アドヴェンチャラーズの中には、指定港になったドイツの都市で毛織物を売るだけでなく、ドイツの内陸部へかけて直接販売したり、指定港以外の内陸部の都市に居住して活動する商人も現われた。とりわけ中東部ドイツの麻織物の生産地でイギリス人商人が活動していたことは、はじめに述べたようにすでにオバンとクンツェの著書でも言及されているが、バウマンの著書の付録には、指定港以外のドイツで営業したイギリス人商人七九人の名前と経歴が掲載されている。以下では、指定港以外の都市や地域におけるアドヴェンチャラーズの活動について、いくつかの事例を紹介してみよう。

エムデンがドイツ最初の指定港になった一五六四年の八月に、エムデン・コートに所属するアドヴェンチャラーズのリチャード・チャプマン (Richard Chapman) が六〇反<sup>クロス</sup>の毛織物をハンブルクで仕上げて、フランクフルト・アム・マインの大都市へ運んでいる。この時、エムデンの市参事会は八台の馬車を提供したという。七〇年以降には、ア

ドヴェンチャラーズの直接販売地域はケルンとフランクフルトばかりでなく南ドイツへ、さらに東部ドイツやオーストリア、北イタリアにまで拡大しており、一七世紀に入る頃には、ミュンスターに定住してシュターデのほかロンドンやアムステルダムと取引しているイギリス人商人少なくとも三名の名前が確認されている。<sup>(10)</sup>

こうしたアドヴェンチャラーズの内陸ドイツへの進出は、単に仕上げずみのイギリス毛織物の販売のためばかりではなく、帰り荷としてイギリスへ送る商品を現地で直接買付けるためでもあった。彼らが好んで買付けたのは、主に、北西ドイツ（オスナブリュック、パーダーボルン、ミュンスターなど）の麻織物、南ドイツの綿織物（バルヘント・ファステイアン）と麻織物、イタリア製の上等のベルベットや絹などであった。

ライプツィヒでは一五七〇年頃に、イギリス毛織物とセーム革を売って麻織物を買付けたイギリス人商人が確認されているが、バウマンはライプツィヒで取引していたイギリス人商人の名前を、一六世紀後半について一三名、一七世紀前半について一二名（うち六名は重複）あげている。彼らの活動に対してライプツィヒ市の商人たちは一五九七年に、入市期間中のイギリス人の当市での取引を禁止するように市参事会に要望している。<sup>(11)</sup> なお、後述するように、この時イギリス人商人が中東部ドイツの麻織物の生産地域と接触したことを見過ごしてはならない。

指定港以外の内陸の都市のなかで、イギリス人商人が最も多く来訪し、数十年間にわたって居住していたのは南ドイツのニュルンベルクであった。<sup>(12)</sup> ニュルンベルクに初めてイギリス人商人が来訪したのは一五六九年のことで、七〇年代には同市に居住する者も現われた。市参事会は七九年にイギリス人が持ちこんだ毛織物に課税している。

イギリス人商人の数は八〇年代に増加を続け、一六世紀末までに少なくとも一八人が居住し、そのうちの一人、ウィリアム・スミス（William Smith）は八二年に完全な市民権を取得した。そのほか一〇名が居住権（*denizen*, *Inwohner* od. *Schutzverwandte*）を認められ、ニュルンベルクの女性と結婚した者が二人いた。イギリス人居住者の多くは



表 9. 16 世紀後半にニュルンベルクに滞在したイギリス人毛織物商人

名 前	出身地	住民権か 市民権を 取得した年	ニュルンベルク滞在が記録されている年
Babinson, Clement	ヨーク	—	1591
Beitschier (Beschar), Heinrich	ロンドン	—	1569, 1572, 1580
Best, Richard (Reinhard)	〃	1588	1588, 1593, 1595, 1597, 1599, 1602
Bewitsch Heinrich	〃	1575	1575, 1576
Born, Jan and associates	〃	1583	1569, 1572, 1580, 1582, 1583
Brag, Thomas	—	—	1597
Brugk, Johann	ロンドン	1599	1597, 1599
Collinoir, Thomas	〃	—	1569
Granger, Ruprecht	〃	1593	1593—95, 1597—99 (1599 年と 1602 年 英国) ; 1604 年ニュルンベルクで死去
Kenis, Eduard	〃	1573	1573, 1575
Lowe (Lose), Thomas	—	—	1580, 1590, 1592
N. Ruprecht (agent of R. Osborn)	—	1588	1588, 1593
Osborn, Reinhard	—	1588	1588, 1593—95
Parvish, Edward	ロンドン	1583	1583, 1590, 1592
Parvish, Henry	—	—	1572—80, 1590—93
Patterson, David	—	—	1569 年にニュルンベルクの市民権を放棄, アウクスブルクへ行く。
Pecock, Robert	—	—	1572
Smith, William	—	1582	1580—91
Walker, William	—	1579	1579, 1580

「金の鷺鳥」(Goldene Gans) とう「当時ニュルンベルクで最も古い、最も大きな宿屋」に居住して、商品もここに保管していた。そのほか市民の家に居住していた者も確認されており、この点で、市民からある程度隔離され、組合のコートの規制を受けて共同生活を送っていた「居留地」的な指定港都市での生活とは異なっていたようである。

(表9参照)。

一七世紀に入ると事情は変った。一七世紀最初の二〇年間にニュルンベルクで確認される一二名のイギリス人のうち居住者は僅か二名で、他の一〇名はいずれも指定港のシュターデに移り、ニュルンベルクへは商売のために来訪することになった。イギリス人の大部分がニュルンベルクから引上げたのは、毛織物についていえば、シュレージエンなど内陸ドイツ製の毛織物の競争が始まって、イギリス毛織物の販売が困難になったからだといわれている。このようにして一七世紀初めには、ニュルンベルクはイギリス毛織物の染色・仕上げと販売の中心地としての役割を失っていた。ただし、中東部ドイツ製の麻織物の染色・仕上げの中心地として、ニュルンベルクの麻織物取引が発展したのはまさしくこの時期であったことも忘れてはならない。最後にその点に触れておこう。

ザクセンからオーバーラウジツ、北ボエーメン、シュレージエンにかけて中東部ドイツに広がる麻織物の生産地帯には、本稿が対象とする一六世紀後半から一七世紀半ば頃まで、ニュルンベルクの商人が進出して、大量の麻織物を買付けて南欧の大都市で売りさばいていた。そのばあい彼らは、織布工の一人ひとりから買付けるばかりでなく、麻織工ツンフトとの間に「ツンフトカウフ」(Zunftkauf) とう一括買付<sup>(13)</sup> 納入契約を結んで、ツンフトから一括して買付けていた。ニュルンベルク商人が現地の麻織工ツンフトとの間で結んだ「ツンフトカウフ」の契約は一〇〇〇件をこえていただろう、といわれている<sup>(13)</sup>。これは、ドイツの間屋制度の歴史上独自の形式として注目されているが、この分野にもすでにイギリス人が進出していたことは前述したとおりである。最後に、この分野に進出したイギリス人

商人のなかから三人を選んで紹介しよう。<sup>(14)</sup>

(一) ウィリアム・ボールドウィン (William Baldwin) ボールドウィンは指定港の三市ばかりでなく内陸の大都市ライプツィヒを訪れ、一五九八年に同国人プルト (Wilhelm Putt) と組んでイギリス毛織物を販売していた。ライプツィヒではバイヤー (Lukas Bayer) が彼の代理商をつとめ、ハイン通りのバイヤーの住居に織物の店を開いていた。毛織物の販売から麻織物の買付に進み、ザクセンからシュレージエンにかけて麻織工に対する前貸を展開し、「ツンフトカウフ」の契約を締結した。最初の契約は、一五九七年にケムニッツのツンフトとの間で結んだ。五〇〇反<sup>ピース</sup>の粗麻織物 (六〇エレの長さの Schockleinwand) と七〇〇枚のタオルの買付契約で、翌年と一六〇二年にはあのヴィアティスルペラー商会と組んで「ツンフトカウフ」を結び、一六〇二年にはシュレージエンのグライフェンベルクでも麻織物を買付けている。

そのほかボールドウィンはロンドンのジャクスン商会 (Thomas & Richard Jackson) とも組んで、ライプツィヒに共同の毛織物保管用の倉庫を設け、ドレスデン、チョッパウで麻織物とテーブルクロスを買付け、一六〇一年にはフライベルクの麻織工とも三年間の買付契約を結んでいる。フライベルクに居住して、遅くとも一六〇七年までに市民権を取得したが、この頃にはジャクスン商会との関係は解消していた。彼はまた、ミュンスター地域の麻織物の輸出港であったエムデンでこの麻織物輸出を仕切る有力なブローカーの一人でもあった。ボールドウィンがマーチャント・アドヴェンチャラーズ組合に所属していたかどうかは不明である。彼が組合員でなかったという陳述がある一方で、彼はニュー・マーチャント・アドヴェンチャラーズ組合のメンバーとして、一六一八年六月に結ばれたこの新組合とハンブルク市との協定の署名人の一人でもあった。

(二) ウィリアム・クラドック (William Craddock) 一五九〇年頃指定港のシュターデでイギリス毛織物を売ってい

たが、ここからハンブルク、ライプツィヒ、リユーネブルク、プラハなどを訪れて売りこみ、アドヴェンチャラーズの活動を禁止する帝国令（一五九七年）が出たあとも、これに違反して活動を続けた。一六〇〇年にはドイツ製の家具、什器をイギリスへ輸入し、翌年からハンブルクに居住してシュターデと取引した。ドイツ製の麻織物のシュターデへの販売では、フレッチャー（Thomas Fletcher）と並んで最有力商人であった。たとえば、一六〇二年には麻織物四三パック、一五五バレル、一二一ボックス（四五万リユーベック・マルク相当）を扱っている。ライプツィヒでもイギリス毛織物を売ってシュレージエン製の麻織物を買っていたが、ボールドウインのように現地の麻織工と接触していたかどうかは不明である。ロンドン商人ジャクソン（Thomas Jackson）の代理商になったこともあり、一六一一年にはロンドンのオルダーマン・コケインのために麻織物五パック、四<sup>12</sup>バレル、二七ボックスをマグデブルクとリユーネブルクからハンブルクへ運んで、イギリスへ船積みしている。クラドックは、エリザベス一世の時代に創設された特権貿易カンパニーの一つ、「イーストランド・カンパニー」（一五七八年設立）の組合員であり、一六一六年から一八年まで新マーチャント・アドヴェンチャラーズ組合の代理人であったが、ドイツではインターローパー（非組合員）の活動を続けていた。

(三) エドワード・ウェストン（Edward Weston） ウェストンは一五八〇年代からロンドン商人カスバート（Martin Cuthbert）<sup>(15)</sup>の代理商をしていたが、一六世紀末には自分の商売でライプツィヒの大手を訪れて、イギリス毛織物を売りはじめた。一六〇〇年以降ゲルリッツに代理商フレンツェル（Ambrosius Frenzel）を置き、ウェストン自身もゲルリッツに滞在した記録がある。この代理商のフレンツェルは、一六〇六年にロンドンのカスバート（ウェストンの主人）のために麻織工と「ツunftカウフ」<sup>(16)</sup>の契約を結んでいるが、同年に破産して行方をくらました。翌〇七年にケイトリー（Thomas Keighly）<sup>(16)</sup>が代理商になったが、ゲルリッツで長くウェストンの代理商を努めたのはグレンツェ

(Tobias Gränze)であつたようである。ちなみに、グレンツェの娘と結婚したロジャー (Thomas Roger) はのちにゲルリッツでケイトリーの代理商をしている。

ウェストンについては一六二〇年と二二三年に、ブレスラウ市民コイト (Tobias Koyt) との取引の記録のなかに「ゲルリッツのイギリス人エドワード・ウェストン」と記されている。彼はまた新マーチャント・アドヴェンチャラーズ組合の組合員で、同じ一六二〇年にはスペインとも貿易をしている。なお、同姓同名のエドワード・ウェストンが一六二四年にナイトに昇進し、議会の議員になっているが、彼と同一人物であるかどうかは不明である。同じように、一五九〇年頃シュターデに滞在していたウェストン (Em. Weston) も彼であるかどうか疑わしい。

# 注

- (1) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 147, 148.
- (2) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 148.
- (3) ただし、イギリス毛織物の再輸出については「<sup>一</sup>シヤッペン (三シュトゥーパー)、カージーは「<sup>二</sup>シヤッペン (二シュトゥーパー) の関税を徴収した。トン税は一隻につき七ギルダーであつた。
- (4) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 155, 156.
- (5) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 148, 149. なお、ハンブルクでもイギリス人より南ネーデルラントからの来住者の方がずっと多く、Brookinsel に商人や船主を中心に新来住者の町が成立した。アムジンク家やベーレンベルク家はこの時から続いている商人一族である。
- (6) 毛織物・反の関税は外国人が四リユーベック・シリリングであつたのに対して、アドヴェンチャラーズは「シリリングであつた。新産業が興り、新市場が開かれた時にこの機会を巧みに利用して発展した都市の例として、リユーベックに対するハンブルクの関係はブリュッヘ (ブリュージュ) に対するアントウエルペンの関係に似ているように思われる。
- (7) 七世紀初めの英国は、基本的に原料と半製品を輸出し、重要な工業製品をドイツ、イタリア、オランダ、北欧などから輸入していた。このことは、マーチャント・アドヴェンチャラーズ組合の書記の記述 (John Wheeler, *Treatise of Commerce*,

1601) からも明らかだ、とレヴィは述べている。H. Levy, *Der Wirtschaftsliberalismus in England*, 1928, S. 96. ホープの会計簿によれば、ハンブルクから英国へ運ばれた主要な商品は、一五六三—六八年には麻織物、羊毛、亜麻で、六九年以降次のものが加わった。中南部のファステイアン（バルヘント）、金属の薄板、真鍮、ワイヤー、鉄製品、ニュルンベルクの金物、東部のプレスラウのあかね、ハンガリーの銅、イタリアの絹、最高級の絹製品、西アジアとインドの胡椒その他の香辛料、綿。なお、一五三五年のアントウエルペンの夏の大会を訪れた二三人のアドヴェンチャラーズのなかで、持ちこんだ毛織物の総額の約半分を一七人（二三％）の商人が扱っていた。W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 157, 158. ロンドンからハンブルクへの毛織物輸出に要した経費については表 6 を参照。一五六七—六八年にアントウエルペンからロンドンへ搬入された商品については、中沢勝三、前掲書、第三章を参照。

(8) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 149, 150.

(9) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 160—164. 表 7 を参照。

十七世紀初めにシュターデには Samuel Aldersey（主人は Alderman Lowe）、Daniel Anderson（Richard Venn）、William Baldwin（William Pennyfather）、Mr. Beresford（Thomas Coolmer）、Alderman Lowe、Thomas Moulson）、William Craddock（Thomas Jackson、Alderman Cockayne）、Thomas Keightly（Edward Weston）、John Morley（Randall Mannynge & Co.）、John Offield（Thomas Jackson）、Richard Rawstorn（Lionel Cranfield）、Samuel Watts（Alderman Lowe、Thomas Moulson）、Edward Weston（Cuthbert Martin）などのイギリス人代理商がいたが、彼らのなかには主人に雇われていた者も独立の代理商もあり、自分の商売のためにドイツ人の代理商を使っていた者もいた。また、ロンドンの輸出商のなかには年一〇〇〇以上の毛織物を輸出していた有力な

表 6. ロンドンからハンブルクへ送られたイギリス毛織物 1 Pack (=10 クロス) の平均価格 (1566—72 年)

	£	s	d	(リユーベック・マルク)
ロンドンの卸売価格	50			(450)
船積みまでの経費	5			(45)
ハンブルクまでの運賃		11		(5)
ハンブルクの輸入関税		5		(2. 1)
ハンブルクでの価格	55	16.	0	(502. 1)

W-R. Baumann, *op. cit.*, p. 157.

表 7. ロンドンからシュターデへ送られたイギリス毛織物 1 Pack (=10 クロス) の平均価格 (1601 年)

	£	(リユーベック・マルク)
ロンドンの卸売価格	60	(540)
シュターデまでの運賃と輸入関税	7	(63)
シュターデでの価格	67	(603)
平均の販売価格	88	(792)

W-R. Baumann, *op. cit.*, p. 163.



商人もいたが、マニング商会は中位の輸出商であった。

- (10) 三名は John Barlow (Johann Barlo), Joseph Soone, Lancelott Wotton (Johann Lancelott Witten) である。このうち、バーロウは一六〇九年にミュンスターの女性と結婚して市民権を取得し、ほぼ毎年ロンドンを訪れ、一六一〇—一一年にはロンドンに代理商(金匠の Arthur Basset)を置いていた。スーンは一五八九年にミュンスターの女性と結婚して市民権を取得している。一六〇四年にアムステルダムで毛織物を買いつけているが、シュターデともロンドンとも取引をして、定期的に訪れていた。ウォートンは一六〇四年にシュターデでイギリス毛織物八反と麻織物四九反<sup>（ドイツ）</sup>をバーター取引している。ミュンスターの市民登録簿には、イギリス人ヨハン・ランスロット・ウイトンという者が妻(Gese Berndts)と六人の子供を連れて一六〇一年にクロニンゲンからミュンスターへ移って、市民権を取得した、と記載されているという。一六三七年にはエムデンから着いたスペインのぶどう酒の船荷をミュンスターで受けとっている。W. - R. Baumann, *op. cit.*, Appendix 2, なお、一五四三年から一六〇五年の間に、二〇人以上のアドヴェンチャラーズが毛織物の販売と絹織物その他の買いつけのためにフランクフルトの大手を訪れている。

- (11) W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 167.

- (12) ニュルンベルクにおけるイギリス人商人については、W. - R. Baumann, *op. cit.*, p. 157—182. ウィリアム・スミスはチェシャーの Oldhaugh の生まれ、オクスフォード大学で学んだのちロンドンに出て「小間物商組合」の組合員になった。ニュルンベルクへ移ったのは一五七〇年代末で、八〇年に同市民の未亡人と結婚して五人の子供を設けた。八二年に市民権を取得したが、九一年にこれを放棄してイギリスへ帰り、一六一八年に死去した。ニュルンベルクの女性と結婚した他の二人は、ヨーク出身のバビンスン(Clement Babinson, 一五九一年結婚)、とロンドン出身のグランジャー(Robert Granger, 一五九七年結婚)である。グランジャーは妻と別居してイギリスにいたこともあったが、一六〇四年にニュルンベルクで死去した。

- (13) 諸田實「一六、一七世紀中東部ドイツ麻織物工業における『ツンフトカウフ』」(『商経論最』一六—四)、「バルトロメウス・ヴィアイス—南ドイツ麻織物商の生涯と遺産」(『商経論最』九—二)

- (14) 以下の三人の経歴と活動については、W. - R. Baumann, *op. cit.*, Appendix 2, 三人のうちボールドウィンとウエストンはオバンとクンツェの著書(G. Aubin u. A. Kunze, *Leinenerzeugung und Leinenabsatz im östlichen Mitteleuropa zur Zeit der Zunfthäufte*, 1940)に名前が載っている。

- (15) カスバートはクーヴェ(Martin Kyhwe)と同一人物と思われるが、クーヴェの代理商にはウエストンのほかにオーバー

トン (Lawrence Overton) もいた。オーバートンはライプツィヒの大都市で、また大都市と次の大都市の間にも、ハイン通りの Hans Dietrich の家でイギリス毛織物を売っていた。一五八八—一六〇七年の間にたびたびケムニッツに滞在してテーブルクロスとタオルを漂泊し、一五九三年にはクーヴェの代理商として西ザクセンでヴェイル用の布を、四〇グルデン買いつけている。ハンブルクに居住し、一六〇三年にはドイツ各地からシュターデへ送る繊維品（麻織物？）の取引で大きなシェアをもつインターローパーの一人であった。W. - R Baumann, *op. cit.*, Appendix 2.

(16) ケイトリーはロンドン出身、一六〇三年七月のシュターデの船主 (Peter Motham) の手紙のなかに、ケイトリーが彼の船の荷主の一人であったとある。一七世紀初めには、中東部ドイツの麻織工に前貸をしていた商人の一人で、オバンとクンツェの著書にも Keylein, Th. の名前がある。一六〇九年にシエトルペンの麻織工ツンフトと「ツンフトカウフ」の契約を結び、一年にグライフェンベルクでシュルツの子供の代父と記されており、二年にも麻織工と「ツンフトカウフ」の契約を結んでいる。この時には、麻織工が契約に違反して同じ品物を他の商人にも納入している、と非難している。一六一一年以降にはハンブルクで対英貿易を行っているが、四〇年代にゲルリッツで結婚し、「ロンドンの有力な商人」と呼ばれた。W. - R Baumann, *op. cit.*, Appendix 2.